**『わたしから貴方へ』**

安達桜さんへ

前略、なんとかかんとか。

　安達に手紙を書くのはこれが初めてですね。そもそも絵葉書というものは送ったことがありますが、ちゃんと手紙を書くということ自体、初めてかもしれません。書きやすいのでですます調になっていますが、深い意味はないので気にしないでください。

　手紙という形にしてみたら、お互いに思っていることが伝わりやすいのではと思いついて気軽に提案してみましたが、案外、書くことがなくて困っています。正確には文章にするということが存外苦手な自分に気づかされて、かつての高等教育への不真面目さを嘆くばかりです。

　安達と最初に出会ったときのことはよく覚えています。あのときの暑さも、蝉の声も、今でも頭の中ですぐに再現できそうなくらいです。あの頃のわたしは、隣に座る安達の横顔をよく覗き見ていました。同級生の横顔なんてじっくり眺めるのは初めてだったので比較は難しいのかもしれませんが、わたしには他の子より綺麗に見えていました。無表情のようでその実、感情が水面を打つように、他愛ない話の中で瞳が揺れるところを見ていました。

　思えばその安達横顔が見たくて、体育館の二階に通っていたのかもしれません。

　そんな安達と、何年も経って一緒に暮らす日が来るとはあのとき、まったく想像していませんでした。わたしたちが決めた居場所、二人だけの国。次はその国に、お城を建ててみようというのが、最近のがんばる理由です。叶わないかもしれませんが、目標があるというのはやっぱり、生きやすいのがいいと思います。安達はわたしと二人でどんなことをやってみたいでしょうか。わたしは最近、寝る前に目をつむっているとそんなことを考えていますが、色々と思い描いてはあれもいい、これも楽しそうと一人で盛り上がっています。これは、なかなかすごいことだと思います。わたしはどちらかというと怠惰な人間だと自覚しているのですが、そんなやつがショーケースに飾られた夢を熱心に覗いているのはなんというか、すごいです。

　安達と一緒に生きるってどういうことなのかを、とても分かりやすく実感しています。

　安達はわたしにいつも元気を与えてくれます。仕事が終わって帰って安達が待っていてくれることも、先に帰って安達を待つときも、どっちも嬉しいです。あまり難しいことは言えないのですが、毎日感謝しています。直接言うのは少し恥ずかしいので、この気持ちは手紙だから伝えられるのだと思います。それでもやっぱり、ちょっと恥ずかしいけど。

　書き終わったらすぐ交換して読み合うことになっていますが、読まれてすぐ顔を見られると困っちゃうので、安達の手紙を受け取ったら取りあえず外へ逃げようと思っています。ついでにちょっと買い物してくるので、落ち着くまで待っていてください。短い内容ですが、書き上げるとなかなか満足感があるので、手紙も悪いものではないと思いました。時々、こうやってお互いに送って見るのもいいのかも。形として残ってしまうのは少し恥ずかしい気もしますが、残るからいいのかもしれませんね。これからもお互いに健康に気をつけて、一日でも長く一緒にいられることを願っています。

　ではまた。すぐ。

　それと隣の寝室で手紙を書くときは、音読しながら書かない方がいいと思います。

　好きだよ、安達。

島村抱月